

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

| | |
|--|---|
| 申請者 (ふりがな) | 小林 莉奈 (こばやしりな) |
| 所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載) | 早稲田大学大学院人間科学研究科 修士課程 2年 |
| 発表年月 または事業開催年月 | 2022年 10月 |
| 発表学会・大会 または事業名・開催場所 | 日本認知・行動療法学会 第48回大会 |
| 発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること) | 小林莉奈, 内田太朗, 富田望, 熊野宏昭 |
| 発表題目 (※学会発表の場合のみ記載) | 拒絶過敏性が認知的フュージョンおよび体験の回避を媒介して非定型鬱症状に及ぼす影響の検討 |
| <p>発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)</p> <p>非定型うつ病の診断基準の一つである拒絶過敏性とは、「他者から拒絶されることを心配し、さらに予期し、すぐに知覚し、拒絶に過剰に反応する傾向」と定義されており、(Downey & Feldman, 1996), 特性的な側面を有している (Parker, 2007)。拒絶過敏が高い者の特徴としては、拒絶を知覚したのち、自己価値や自尊感情と関連する否定的な自己関連認知が誘発されることが指摘されている (Monroe, 2007)。また、その認知が、恥や劣等感といったネガティブな情動を喚起するというプロセスも示唆されている (Parker, 2007)。このプロセスにおいて、認知行動療法の一つである、アクセプタンス & コミットメントセラピー (Acceptance and Commitment Therapy : ACT) における認知的フュージョンと体験の回避を精神病理の維持・悪化プロセスの中心の概念が関与している可能性がある。小林他 (2021) では、拒絶を感じたのちのプロセスには、認知的フュージョンと体験の回避が関与している可能性が考えられる。先行研究では、拒絶過敏性が認知的フュージョンおよび体験の回避を媒介し、非定型うつ症状に影響を及ぼすことが示唆されている。しかし、認知的フュージョン傾向や体験の回避傾向の程度の違いによって、拒絶過敏性と非定型うつ症状の関連の強さがどのように異なるのか明らかではない。したがって、本研究の目的は、認知的フュージョン傾向および体験の回避傾向が、拒絶過敏性と非定型うつ症状の関連の強さを調整するか検討し、その研究結果を発表した。</p> <p>大学生 138 名を対象とした共分散構造分析の結果、認知的フュージョン傾向や体験の回避傾向が高い者に対しては、脱フュージョンやアクセプタンス介入を行うことによって、拒絶過敏性が非定型うつ症状に及ぼす影響を弱めることが期待できる。</p> <p>本発表で、特性とされている拒絶過敏性への介入研究の可能性や、ACT を用いる意義についてディスカッションを行ったことにより、今後の展望が精緻化された。</p> | |